

第2章 金ヶ崎周辺の特性

2-1 金ヶ崎周辺の特性

(1) 金ヶ崎周辺の特性

ア) 古代からの環日本海交流の重要拠点

深く入り組んだ形の湾が天然の良港を呈している敦賀湾は古くから環日本海交流における重要拠点となっており、奈良時代から平安時代にかけては大陸の渤海国の使節団、渤海使が朝廷への貢物を携え度々敦賀から上陸したと考えられています。

「延喜式」には渤海使を受け入れ、歓待などをするために外交施設「松原客館」が建設されていたことが書かれています。

イ) 南北朝時代の悲劇の舞台

延元元年/建武3年(1337年)に新田義貞らと官軍再興のために氣比大宮司の居城、金ヶ崎城に入った尊良、恒良両親王は、足利尊氏が送った6万の軍勢に攻め立てられました。尊良親王は金ヶ崎城落城の際に三百余人の将士とともに自害されました(享年27歳)。また、恒良親王は一旦脱出に成功した後捕えられて京都に幽閉され、毒薬を盛られて亡くなりました。(享年15歳)



写真：尊良親王自刃見込地

ウ) 秀吉天下取りの足がかり、金ヶ崎の退き口

織田信長は朝倉義景討伐のため、元亀元年(1570年)に家康らを伴って敦賀に進軍しました。天筒山城、金ヶ崎城を攻略しますが、浅井長政の寝返りにあい、大きな窮地に陥ります。この時、秀吉が金ヶ崎城に殿しんがりとして残り、無事、信長を難関から逃げのびさせたことにより、武功を上げ、その後の天下人としての足がかりを掴んだと言われています。

エ) 北前船の寄港地

江戸時代、敦賀は北前船の寄港地として栄えます。昆布やニシンなどの北方の産物を日本海、琵琶湖、淀川を經由して畿内に運ぶルートにおいて、敦賀は非常に重要な役割を担い、港町敦賀は活気にあふれていました。

オ) 松尾芭蕉ゆかりの地

俳人・松尾芭蕉が『おくのほそ道』で敦賀の地を踏んだのは、元禄2年(1689年)年8月です。芭蕉はとりわけ敦賀での仲秋の名月を楽しみにしていたと言われています。8月14日から16日の敦賀滞在で、氣比神宮～金ヶ崎～金前寺～色の浜～本隆寺を渡り歩きました。

金前寺には、芭蕉が金ヶ崎城落城の悲劇にまつわる陣鐘の逸話を聞き詠んだ句「月いつく 鐘ハ沈める 海の底」を刻んだ碑が建立されています。



写真：松尾芭蕉像(氣比神宮)

カ) 欧州とアジアを結ぶ国際的中継地（東洋の波止場）

金ヶ崎周辺は、明治後期～昭和初期にかけて、欧亜国際連絡列車と欧亜国際連絡船の中継地であり、欧州と向き合う日本の表玄関口の一つでした。ロアルド・アムンゼン（探検家）、ブルーノ・タウト（建築家）など世界的な著名人も金ヶ崎でアジアへの第一歩を踏んでいます。

この時代が、敦賀市の歴史上、最も輝かしい時代の一つであり、金ヶ崎周辺には洋風建築物が建ち並び、盛装してステッキを持った男性やパラソルを差した女性らが往来するなど、モダンでエキゾチックな街でした。



写真：レンガ倉庫と背後の緑地



写真：敦賀港に上陸した外国人観光客(大正初期)



写真：欧亜国際連絡列車と欧亜国際連絡船の中継地であった鉄道棧橋

キ) 人道の港

ポーランド孤児やユダヤ人難民の救済に向けて市民らが手を差し伸べたエピソードが「人道の港 敦賀」の物語として伝え継がれており、誇るべき郷土の美談、受け継ぐべき先人の尊い精神です。

敦賀上陸によって辛くも難を逃れたユダヤ人難民らは、敦賀の地を「ヘブン（天国）」と呼んで深い愛着の念を示したことが伝わっています。

ク) 歴史的背景を持つ固有の祭事の舞台

10月20日には、尊良、恒良両親王の配下の将士が管楽の船を海に浮かべて紅葉を愛で月を賞したという故事に倣った祭り「御船遊管絃祭」の「船遊び神事」が海上で執り行われます。

また、金ヶ崎周辺に多くの人が行き交い賑わった明治40年代、人々の心も春めく桜の時期に、男女の縁を取り持つ格好の機会として、金崎宮を舞台に花換まつりが始まりました。



写真：花換まつり(金崎宮)

これらの祭事が現在にも執り行われていることにより、後世の私たちと歴史や史実とがつながり、郷土への愛着や誇りを育んでいます。

2-2 往時の史実分析

海路と陸路の中継地点、東洋の波止場（オリエンタルワーフ）と呼ばれていた鉄道棧橋周辺にドラマが生まれ、現存する赤レンガ倉庫、ランプ小屋、線路が歴史を今に伝えていることから、これらの資源や史実を郷土に対する愛着や誇りの醸成、多様な交流による地域活性化に活かします。

○埠頭、棧橋まで鉄道が伸び、駅だけでなく、税関や商船会社の洋風建築物が建ち並んでいました。

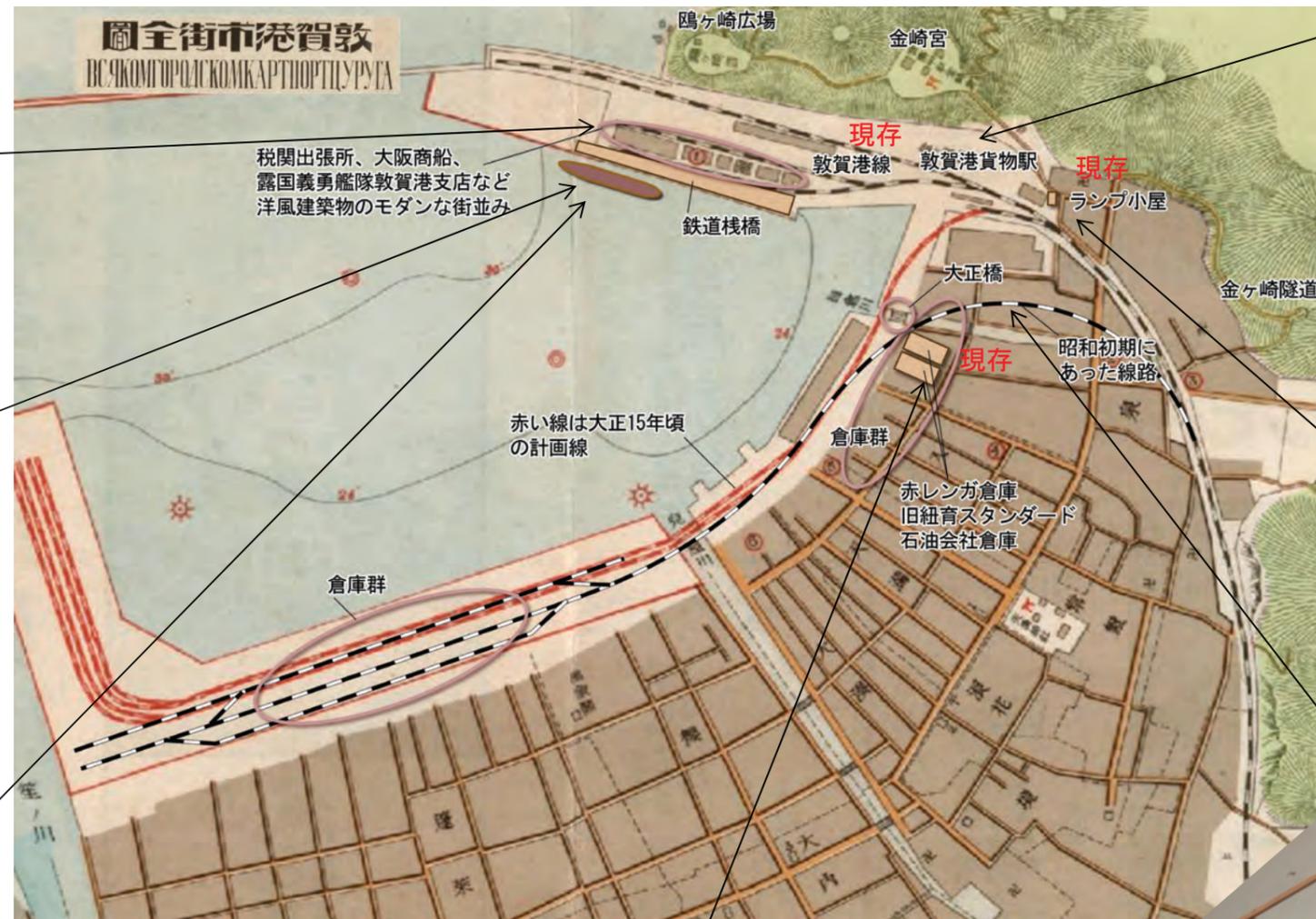


○金ヶ崎周辺は欧州からアジアへの玄関口であり、埠頭、鉄道棧橋は多くの人々がそれぞれの胸に様々な想いを抱きながら行き交いました。



○シベリアに残されたポーランド孤児やユダヤ人難民たちも金ヶ崎周辺を入口にして日本へと逃れてきました。当時の敦賀の人々の彼らに対する思いやりのあるもてなしの様子など心温まる物語が伝えられています。

○その中の一つとして、少年がりんごなど沢山の果物が入った籠を置いて行った逸話は、敦賀港駅近くでのエピソードとして伝えられています。



○休止中の線路は、港と鉄道で栄えた金ヶ崎周辺の歴史を今に伝える遺構です。



○ランプ小屋は100年以上前から列車の運行に欠かせない施設としてこの地に建っている貴重な近代化遺産です。



○敦賀港からは人だけでなく多くの物資が出入りしており、港周辺には倉庫が建ち並んでいました。

○旧紐育スタンダード石油会社の赤レンガ倉庫は、その中でも大きなもので、当時、金ヶ崎周辺に上陸した人々が見た風景を形作った建造物であり、当時の人々と現代の我々をつなぐ重要な資源です。



○昭和初期には赤レンガ倉庫前を通る支線「敦賀新港線」がありました。

